

特論の総まとめ：「デジタル情報」といかに付き合うか

◆ 平野・後藤の論文より

* アジア歴史資料センター（アジ歴）

- ・組織を横断するイニシアティブ：分散から集約へ
- ・「利用しやすさ」「認知度」vs「公正性・客観性」（公的機関として）

* 後藤による「デジタル・アーカイブズ」の課題と意義の提起

- ・ポイントは p. 36 以降
 - 図書館界以外でメタデータや標準の重要性を認識しているのは日本では稀少！
 - 「デジタルデータに信用がない」（p. 38）は皆さんにとってはどうか？

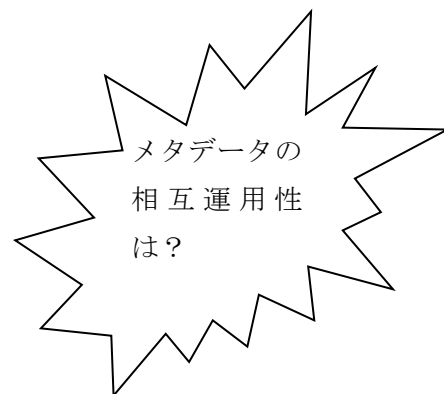
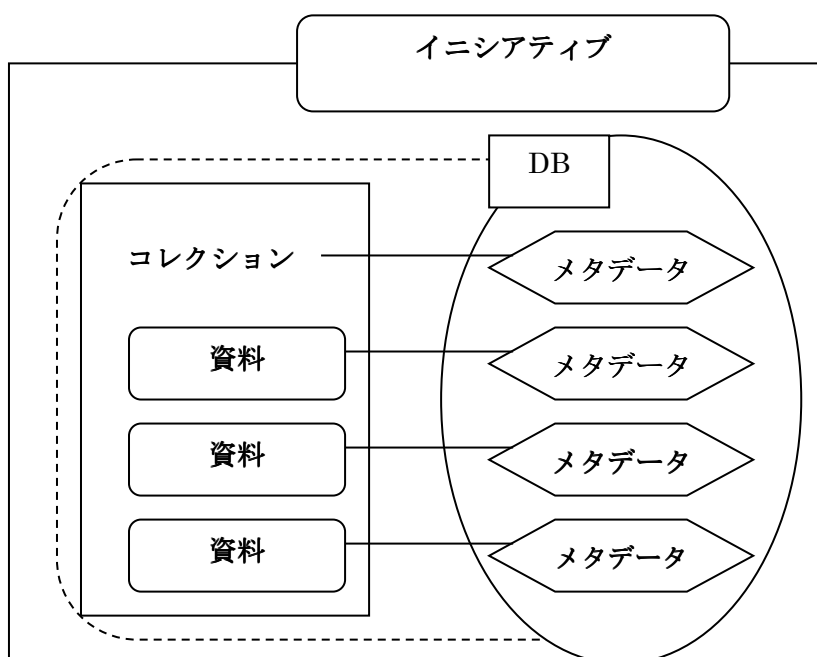
※語句の補足（p. 41）：いずれも XML に準拠、タグによる記述。

- EAD (Encoded Archival Description)：資料とその階層構造（まとまり）の記述。
- EAC (Encoded Archival Contexts)：資料どうしのつながりの記述。図書館界における著者や団体名の「典拠コントロール」に相当。
- EAG (Encoded Archival Guide)：文書館のコレクション全体、および組織としての文書館について記述。

【参考文献】

後藤真・田中正流・師茂樹『情報歴史学入門』金壽堂出版, 2009.

◆ メインテキストの全体像



◆ **メインテキストを振り返って**

- ・ 図書館の世界以外に、どのような形で応用が可能か？
- ・ 「デジタル化したコレクション」をいかに「長期的に利用可能」とするか？
… メタデータとその標準化がカギ

* データベースの構造

- ・ メタデータをもとに → 資料・コレクションをもとに
- ・ 「単一のイニシアティブ」を超えて、どこまで横断的なものができるか
… 相互運用性がカギ

* テキストで触れられなかった点

- ・ 政策形成と、それに向けての働きかけ（アドボカシー）
- ・ 文字コード
- ・ デジタル化の技術（フォーマット選択にも関連） 例：スキャナー、デジタルカメラによる撮影
- ・ デジタル化そのものの是非